
神がここにいる

小田 浩正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神がここにいる

【著者名】

小田 浩正

Z0305BA

【作者名】

【あらすじ】

僕が昨日から困っている」とと言えば、

明日が来ないことである。

…えつと、「はやくあしたがこないかなあ」「など」という、小学生が遠足前に、考えるような素朴で純粋な気持ちは全くないのですよ。

なんでこんなことを考へているかと云うと、僕に降りかかった不幸

のせいである。

僕、穂積隆明は例の事件からのことを考えてしまって、あとの人生がどうなるかなんて全く気にしていなかつた。こんな日々が始まるなど思つてなどいなかつた。

神様その他もうもう出てくるハチャメチャなストーリーが始まります。

そして、『電車内は人の心』 もよろしくお願ひします。

プロローグ（前書き）

この作品、結構面倒です。

神様やその他もろもろ出でます。

ハチャメチャなストーリーが始まります。

どうかよろしくお願ひします。

あと、感想もよろしくお願ひします。

プロローグ

僕が昨日から困っている」と言えば、

明日が来ないことである。

えつと、「はやくあしたがこないかな～」などといつ、小学生が遠足前に、考えるような素朴で純粋な気持ちは全くないのでよ。

なんでこんなことを考えているかというと、僕に降りかかった不幸のせいである。

がどうなるかなんて全く気にしていなかつた。こんな日々が始まるなど思つてなどいなかつた。

いきなりですみません。ちょっとヤバい事態が僕の目の前で起きていたので。

僕の叫びを聞いてしまった近所の方。ホント、すみません！
僕の部屋の壁は意外と薄いので、外からの騒音が良く入ってくるのです。なので逆に僕の叫び声も近所に響いてしまうのです…たぶん。女の子の叫び声ならいいのですが、実際は、高音を喉から無理やり出そうとしているので、聞いてしまった方々は朝から不快にしてしまったでしょう。ホント、すみません…。

第1話 第1章（前書き）

最初からがぶつ飛ばします！

感想よろしくつ！！

さて、状況を説明します。

昨日、僕にとつて今まで生きてきた人生の中で、一番の試練に会つてしましました。そのため僕は、今までにない疲れを感じ、そのままベッドで寝てしましました。なので、寝巻を着てない。風呂にも入っていない。もうそろそろ、秋だというのに、昨日の夜は残暑なんか、暑かつた。

すこし汗を書いているのか、体にシャツが張り付いて気持ち悪い。

「風呂に入ろうかな」

ちよつとずつ鈍い僕の頭がゆっくりですが動き始める。

さつきの叫び声の前あたりに戻りますが、あることに気づいたのです。寝ていたはずのベッドから、落ちているのです。近くに最近買ったマンガも落ちている。元々、寝像は悪い方なので自分でベッドから落ちてしまったのではないかと、考えて田をこする。窓のカーテンからさす日差しに、まぶしさを感じながら、ベッドの上を見たのです。このままの展開ならば……

窓からさす光を浴びて、神々しい姿で寝息（？）しているかわいらしい女の子が、すやすやす寝てこる

とこう真合だと想います。

しかし、僕のベッドに寝てこるのは……。

「なにやつてんだよ！ そんなことないで おばさん が寝てん
なんて！」

そこにいたのは、だいぶ張りのなくなつた頬、唇は不健康さが目立つ感じのすこし紫色に近い。完全なるおばさんがそこにいた。

「……ん。どうしたの……？ 朝から……つるせ……」

僕の悲鳴と怒声で起こしてしまったのか、少し伸びをしていたりを見た。声がかすれている。絶対寝不足だ！と思いつづりこまぶたが重そうである。

「目が覚めたか？ そんじゃあ、『ローアウト。』

「……？ 横文字は弱いんだぞ？」

「わかったから……日本語で言いつ直すから……」

イラついてしまう。不愉快だ。朝からすぐに血圧が急上昇というのは、若くても危ない。

「……うん、早く言つてよ。眠いんだけど……」

「早く！ 出ていけ！」

「……？」

「『』？ じゃあないつ！」

「イミガワカラナイヨ？」

なぜカタカナ？

「お前……ケンカ売つてんのか？」

さて、どうしてやるうか。1日3食抜きにじりやねつが

「……プスウ……」

「……」いつ、布団に潜り込みやがつた！

「無視したつ！ 寝やがつたつ！」

「ムシ～ムシ～ムシ～ムシ～」

「ちょ、ちょっとおい！ き、気色悪いから～やめろつて……」

「……うん……」

理解を得られたようだ。それと言わなければならぬことだが……

「お前さあ、今顔がヤバいぞ……」

「え？ ……か、顔？ ……か、鏡は？」

周りを見回し始めたので、近くにあつた手鏡を渡す。

「ゲッ！」

やつと気づいたらしく。

ここで一応言つておくが、今まで僕が話していたのはおばさんであ

る。女の子ではないぞ！そこを「理解」いただきたい。

「イヤッ！ なんで早く言わないの！」

色々ゴタゴタしていたから言ひ暇がなかつた。早く言えれば良かつたかもしれない。なぜなら…

「うん！ これで大丈夫だよ！ 私もピッチャピチの～」

「…幼女ね…」

一回後ろを見て少しふつぶつ何かとなえたあと、ちやんと昨日通りの顔に戻つた。

「さて、これで君をイチロロにできるよ～」

まさかあ～。僕はこんな奴には欲情がわかないんだよー。『世のロリータ』なるものには興味がない！

「イチロロにするんだつたら女の子じゃなくて、オーナーになりなよ…」

「うつ…」

「でもあ～」

彼女の顔のことが本題ではない。僕が問い合わせたいのが

「なんで僕のベッドで寝ているのかなあ？」

そう、忘れてはいけない！ 今も僕は冷たい床の上にいる。話している最中、彼女が上から僕を見下していたのだ。全くイライラして仕方なかつた。

「だつてさあ。まだこの家に来て一日目の寝る場所がリビングのソファで寝させるなんて、いつたい君は何さまなんだ！？」

「お前の方が何さまだつつのー。ここは僕の家で！ 僕の部屋で！ 僕のベッドなんだぞ！」

「それが？」

「ピチッ… キレたぞ！」

「そこにはいる化けたおばさんが僕の部屋にいる理由など、なーつー息ついて

「そしてお前とあと1週間過ぐなければならぬんだつ！」

「それは、きのうはなしたでしょ？」

「ああわかつてこるとも。そうしなければならぬ理由は彼女にはあるが僕にはないのだよ！」

「それに僕はおばさんとも、幼女とも同棲したくないんだよ！——されいな『お姉さん』かもしくは『美少女』かだ！」

「そ、そんなあ～」

「わかつたか！ 僕はお前が持ち込んだ厄介事を今すぐお前といつしょに、捨てたくて仕方ないんだよ！」

「ね、ねえ～そんなことまで言わなくていいんじゃないかなあ？」

「僕にはこれほど言いたいことがあつたんだよ。昨日言わせなかつたお前が悪い！」

さてどう落としめてやるつか？

「で、でもね？お父様の言つとむりじやなきやいけないんだよ？それがだけは……わかつてくれる？」

こいつのお父様とやらの話をされた。だから、これに対しても一つの言つとおりでないと僕の命が危うい。

「そんじやあ～さあ……何か僕に利益でもあるの？」

「うんうん！ それはこれから君次第だよ！」

……ハツ？

「頑張れば、君の未来は切り開くことができる！」

「……」

「君とならできるんだよ！ 君じやなきやむつだよ！」

「いっ、頬を赤らめながら叫んでいるところがかわいいんだけど、実際にはおばさんだから、少し残念な気持ちにされてしまつ。

「まあ期待しといでいいんだよな？」

「そうだよ。期待しといたほうが絶対いいよ！」

しかし、これからなんだよな。あと一週間耐えられるかわからない。

「さて、僕らがやらなければならぬこととかは、昨日言われたこ

とだけなのか?」

「うんそうだよ。それで、私にもちゃんと能力があるから大丈夫。
なんとか君を助けるぐらことは出来ると思つよ」

「その自信はどこから?」

「元々、保証できるものだから自信があるんだよ!」
「いや、だからそれがどこからなのかって言つてゐるの」

「? だつて神様だから!」

そう、こいつは神様の修行者。

会つたときにそう言われた。堂々とね。

「……うん。わかつたよ」

僕は彼女に笑顔を向けてあげる。内心、憐れんでいます。

「そうでしょ。私のことを信じていれば、君は死ない」

恐ろしいことを言つ。だがこれは脅迫などではない。実際にあつた
から。

昨日は危なかつた。危なかつたというより、死にかけ、死んだ。だ
が、こいつの能力で助かつたのかは知らない。

「あ、すっかり忘れてた」

変なこと思い出してしまつた。昨日のことを回憶していたら、今一
番気にしてなくてはならないことを思い出した。

「今、何時?」

「ヒット…私二八人間デ言ウ時間トイウモノガ理解不能デシテ…」
絶対わかってるよ、こいつ。

「…早く」

「は、はい!」

2人で時計を探し始める。

いつもはベッドの近くに置いてあるのだが、昨日は時計をセットしなかつたためどこにあるのかわからない。

「あつ！ あつたよ」

「何時だつ！」

「午前八時前です」

「ノオオオオ！」

今日は学校なのだ。それも週のど真ん中。自分が起きた時間が把握していない僕がいけないのだが、いままでとは全く関係がなかつたことに関わり始めてしまったため、何もかも狂い始めているのかもしれない。

「ど、どうしたの？」

「学校なんだよ！ 僕たち学生は勉強に励まなければならないんだよー」

自分で言つてるのもなんだが、あまり授業には集中したことがない。

「ちよつと、や、ヤバ！」

「？ ホント大丈夫？」

「制服！ 制服はどこだよ！」

「おいおい。この時間にはもう学校に向かつてなきや間に合わなくなる。昨日のようにはなりたくない！」

「これのことか？」

「おいつ！ なんでお前が踏んでんだよ！」

さて、どうするか？ 親が特殊だから弁当は毎日僕が作つていい。なので、どこかしらで弁当を買わなくてはならない。すべて昨日と同じことをしてしまつている。

また、僕は大変な目に会つてしまつかもしれない。

なんか、「タタタ騒ぎで済みませんが、一応説明しちゃいます。

僕のベッドの上にいるのは、幼女に化けた僕より長く生きている神様の修行者らしい。そして、昨日から居候し始めた。僕はこんな日々を過ごさなければならない。

どうしてこうなったのかは、一回僕の主観の昨日といつより、周りの人々を主観とした昨日から説明をしなくてはならなくなってしまった。

それでは、僕とおばさんの出会いをなるべく短くお話ししましょう。
たぶん短くはならないけど。なるべく短くします！なるべく…。
では昨日の回想を始めます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0305ba/>

神がここにいる

2011年12月31日19時52分発行